ギリシア語聖書の研究〜その構想

伊　藤　利　行

序

筆者は，「筑波大学研究者総覧 1982 年版」において自らの研究課題を「セプトゥアギンタ及びヘクサプラの研究に基づいて新約聖書及び初期キリスト教会の思想を思想史的に解明する」とした。本稿は，この研究の対象と意図，更に研究遂行上の基本的問題点について叙述しようとするものである。ただし，本稿の性質上，叙述は概観的であらざるを得ず，個々の問題については稿を新らたにして詳述する予定であることをおことわりしておく。

第1節　ギリシア語聖書とキリスト教

世に宗教を概観する時，その宗教の教えの基礎を文書的に結集したもの，即ち「経典」(Kanon) を持つ宗教とそうではない宗教とがある。経典を持つ宗教の場合，経典がその宗教にとって基本的に重要なものである以上，その経典を書き記した元来の言語（以下「経典言語」と呼ぶ）が，その宗教にとって極めて重要な役割を担っていると考えてもよいであろう。その経典言語が言語として持つ表現能力が，その宗教の思想表現を決定し，ひいてはその宗教の歴史的展開を規定する。

では経典言語は一つの宗教につき一つの言語であるのだろうか，それとも複数の言語であることもあるのだろうか。今，ユダヤ教・キリスト教・イスラム教という歴史的に関連する三つの宗教，これらを「ヘブライ的諸宗教」(Hebräische Religionen) と呼ぶことにした場合，これらの経典言語は何であろうか。ユダヤ教——この宗教の経典言語は，ヘブライ語であると言えるであろう。イスラム教——この宗教の経典言語はアラビア語であると言えよう。では，キリスト教——この宗教の経典言語は何であろうか。ユダヤ教がヘブライ語，イスラム教がアラビア語というセム語族に属する言語をそれぞれ自らの経典言語としている事から，類比的にキリスト教についてもセム語族に属する一つの言語をその経典言語として考える事は理論的には許されるであろう。そのように考えた場合，キリスト教の経典言語は，キリスト教的理解に基づいて「旧約聖書」と呼ばれ，ユダヤ教によって「律法 תּוֹרָה」・「預言者 נְבִיאִים」・「諸書 כְּתוּבִים」と呼ばれる部分の言語であるヘブライ語をおいて他にはない。しかし．そう考えると我々は直ちに極めて根本的な疑問に逢着する。それは，キリスト教の中心的な事柄である「イエス・キリストの

出来事」を記述している「新約聖書」はヘブライ語ならざるギリシア語で記されているという事実から生ずる疑問である。即ち，ユダヤ教にせよイスラム教にせよ，自らの中心となる宗教的事柄を表現し記述している言語が，その宗教の経典言語であるのだから，キリスト教の場合には，ヘブライ語ではなくギリシア語こそ経典言語であると主張しうるのではないかという疑問である。

そうするとキリスト教の場合，経典言語は二つあるのだろうか。即ち，「旧約聖書」の経典言語はヘブライ語，「新約聖書」の経典言語はギリシア語という風に。現在，世界各国でキリスト教の伝道のために旧・新約聖書が翻訳される場合，その翻訳のテキストとされるのは，ヘブライ語の旧約聖書—ギリシア語の新約聖書である事がほとんどである。現在は確かにそうである。しかし，このような事態は主に16世紀の宗教改革以後のことであって，それより以前はそうではなかった。今，我々に関係する初期キリスト教会の時代，更にそれに先行する新約聖書記者の時代に限って見てみることにしよう。

初期キリスト教会の時代には，経典言語は明らかに旧・新約聖書ともギリシア語であった。当時の世界がヘレニズム世界であった事，又，その世界の中に極めて伝道意欲の旺盛なキリスト教が伝播して行く事を思う時，その中心となる経典の言語がコイネー・ギリシア語以外の如何なる言語でありうるだろうか。新約聖書がギリシア語である事は勿論であるが，旧約聖書もギリシア語であった。といってもキリスト教徒が伝道の為に新らたに翻訳したのではなく，すでに伝統的に彼らの前にあったものを用いていたのである。このギリシア語旧約聖書こそ世界史上超一級の文化遺産である「セプトゥアギンタ Septuaginta」(七十人訳聖書）なのである。キリスト教会がその伝道の開始にあたって，その宗教上の諸観念（例えば，多神教や偶像崇拝等と対決するヘブライ的唯一神の観念）の具体的な提示をしている旧約聖書を，当時の世界言語であるコイネー・ギリシア語の姿で持っていたという事は，彼らにとって如何に大きな助けであった事だろうか[1]。セプトゥアギンタの存在によってヘブライ的信仰世界と異教世界との接触の可能性が既に出来ており，それがキリスト教伝道にとっての下地となって，その上にキリスト教の伝道がなされたのである。正にセプトゥアギンタは，異教世界との折衝において，キリスト教にとって智恵と思索，そして行動への勇気の淵源であったのである。教父達もギリシア語の旧約聖書であるセプトゥアギンタとギリシア語の新約聖書，即ちギリシア語聖書に基づいて思索し著作したのである。とりわけ上述の如く旧約聖書の意義は極めて高い。ギリシア語を母国語としたギリシア教父達，特にアレクサンドリアのクレメンス Clemens Alexandrinus (†ante 215)，オリゲネス Origenes (ca. 185-253/4)，ヨハンネス・クリュソストムス Johannes Chrysostomus (†407) らは，セプトゥアギンタから多量に引用した事からも明らかなように，セプトゥアギンタの神学的基礎概念によって思索し著作したが，その事は決してギリシア教父のみに限定されていたわけではなく，ラテン教父達についてもいいうる。偉大なラテン教父達，テルトゥリアヌス Tertullianus (ca.

160-ca. 220)，キプリアヌスCyprianus (†258)，ミラノのアンブロシウス Ambrosius (†397)，アウグスティヌス Augustinus(354-430) ら西方神学の基礎を創った人々の土台とした旧約聖書は「古ラテン語訳 Vetus Latina」(あるいはイタラ Italaとも呼ばれる)であった。従ってラテン語聖書であってギリシア語聖書ではない。ラテン語聖書といえば，我々の脳裡に直ちに思い浮かぶのが，ヒエロニムス Hieronymus (ca. 347-419/20) が 5 世紀の初めに完成したヴルガータ Vulgata であるが，これは普通に教会の中で用いられるようになるまでに約2世紀という時間を必要としており，このヴルガータの普及前には，上記の古ラテン語訳が用いられていた。この訳は，西方でギリシア語が話されなくなった後に，紀元2世紀後半頃北アフリカで出来たものである。その際，旧約聖書の部分のテキストは何であったのだろうか。ヴルガータの場合，それはヘブライ語本文であったが，古ラテン語訳の場合，それは他ならぬセプトゥアギンタ本文であった。そして，その訳文は，「ラテン語の衣を着たセプトゥアギンタ」といわれる程に忠実な逐語訳であったのである。従って，古ラテン語訳を思索と著作の土台としたラテン教父達についてもギリシア教父達と同様にセプトゥアギンタの神学的基礎概念によって思索し著作したと言いうるのである。このようなセプトゥアギンタからの重訳は，その他の言語でも見ることができる[2]ので，その事からもセプトゥアギンタが如何に大きな役割を初期キリスト教会に対して果たしていたかは明らかであると思う。

次に新約聖書記者の時代について見てみよう。この時代について特別に注意しなければならない事は，当然の事ながら彼らにとっては新約聖書は存在せず，本来の聖書である旧約聖書のみが存在していたという事である。従ってこの時代は初期キリスト教会の時代と基本的に異なる。初期キリスト教会の時代には，すでに彼らの前にあったギリシア語の旧・新約聖書という伝統的に存在していたものを継承するという点に重点があったのに対して，新約聖書記者の時代には，正にギリシア語の旧・新約聖書という伝統そのものを創造するという点に重点がある。そこで新約聖書記者の時代にとっての経典言語を考えるに際しては，次の二点を問題とせねばならない。第一は，彼らは何語で旧約聖書を読み思索したのかという点であり，第二は彼らは何語で書き記したのかという点である。後者から考えてみよう。一応それはギリシア語であるといえる。しかし，そういうことは，新約記者の書き記した文書のすべてのオリジナルがギリシア語であり，延いては彼らの著作の精神がギリシア的なものであったという事を意味しない。例えば，イエスの宣教は，アラム語でなされたのであってギリシア語でなされたのではないという事は自明の事といえよう。また，新約聖書記者の大部分はギリシア語を母国語としないユダヤ人であった。従って，彼らの著作の精神はヘブライ的なものであった。では，次に前者の点はどうだろうか。新約聖書中における頻繁なその引用から明らかな通り，彼らがセプトゥアギンタを読み思索した事は明らかである。しかし，その際に彼らがセプトゥアギンタのギリシア語本文を単にギリシア語表現としてギリシア的にとらえたのだろうか。更に，彼らは旧約聖書の本文をヘブライ語本文では

知らなかったのだろうか。彼らの大部分がユダヤ人であった事を思う時，彼らはギリシア語本文をヘブライ的にもとらえ得た，否，むしろこう言うべきだろう。即ち，ヘブライ的表現をギリシア的表現に移そうとしたセプトゥアギンタの表現法の真意を理解できたと。又，彼らはある程度ヘブライ語本文をも知っていたであろう。そこでこれら両点を総合的に考える時，新約聖書記者の時代，即ち，キリスト教の成立の時代にあっては，経典言語を単純にギリシア語ともヘブライ語とも言い切れないのである。ギリシア語とヘブライ語との密切な緊張関係，「二位一体性」(Duonität) とでも称すべき関係が存在するのである。この関係は一種の翻訳上の問題とも言い得る。しかし，この関係は単なる翻訳上の問題に留まらないキリスト教思想の本質を形造る関係である。なぜなら，旧・新約聖書が出来あがってからの翻訳の問題なら，それは如何に本文に忠実に翻訳するかという問題にすぎないが，ギリシア語——ヘブライ語という関係は，新約聖書そのものの成立の内に含まれる言語的緊張関係として二次的なものではありえず，一次的なものとしてキリスト教思想の本質を形成するものだからである。従って，キリスト教，しかも初期キリスト教の思想を歴史的に考察しようとする場合，その探究の道筋が聖書に至り，このようなギリシア語——ヘブライ語という言語的緊張関係に出会い，新約は旧約を前提とするのであるから，その最終の地点としてギリシア語——ヘブライ語関係の最初の折衝点であるセプトゥアギンタに至る事は思想史探求という遡源運動が当然到達すべき所なのである。

このようにキリスト教にとってギリシア語聖書は本質的なものであり，思想史的にそれを探究しようとする時，まずセプトゥアギンタから始めねばならないのである。

注

(1) A. von Harnack, Die Mission und Ausbreitung des Christentum in den ersten drei Jahrhunderten. I Bd. Die Mission in Wort und Tat, Leipzig 1924[4] の第8章でハルナックは，キリスト教伝道おける聖書の役割について述べ，旧約聖書を高く評価している。

(2) セプトゥアギンタを基礎にした重訳には，古ラテン語訳の他に次のようなものがある。

① コプト語訳……コプト語訳は，五つの方言（サヒド語・ボハイル語・アクミム語・ファイユーム語・メンフィス語）に分れており，サヒド語のものが最も古く（3世紀）て重要である。コプト語訳は，セプトゥアギンタとの関係は勿論のことであるが，古ラテン語訳との関係も時々見られる。

② エチオピア語訳……4世紀に伝道されると同時に，セプトゥアギンタから翻訳された。

③ アラビア語訳……セプトゥアギンタから直接に訳された部分は預言書や詩的書物であり，時代も遅いもの（10世紀）が多い。

④ シリア語訳……テラのパウルス Paulus Tellae が616～7年にヘクサプラ（後述）の第五欄を翻訳したものがあり，普通はシロ・ヘクサプラ Syrohexapla と呼ばれる。

⑤ ゴート語訳……350年頃にウルヒラ Ulfila によってルキアヌス校訂本文（後述）から訳されたが，今日ではほんの僅かな断片が残るのみである。

⑥ アルメニア語訳……メスロプ Mesrop (354-441) によって始められ，ヘクサプラの本文を用いた。アリスタルコスの記号（後述）が付された写本もある。

⑦ グルジア語訳……アルメニア語訳同様メスロプによって始められたとも言われるが疑わしい。5

～6世紀のものと今日では考えられている。

⑧ スラブ語訳……スラブ人に伝道したキュリルス Cyrillus (†869) とメトディウス Methodius (†885) という兄弟によってルキアヌス系本文から翻訳された。

第2節　セプトゥアギンタとヘクサプラ

このようにキリスト教の研究にとってギリシア語聖書の研究は極めて重要なものであり，とりわけセプトゥアギンタの研究はその出発点に位置するわけである。そこで次にこのセプトゥアギンタ及びその関連として登場してくるヘクサプラについて研究の概要を見てみることにしよう。ただしセプトゥアギンタの与えた影響は，音楽・絵画・文学など広く芸術の領域にまで及ぶ程に深く広いものであるので，ここでの叙述も概観といえども決して網羅的であるわけではなく，必要最小限に留まるものであることをお断わりしておく[1]。

セプトゥアギンタという言葉は元来ラテン語の70を意味する数詞である。セプトゥアギンタを「七十人訳聖書」と称することからも明らかなように，この70という数字は翻訳者の人数を示しているのである。どこからこのような人数が出て来たのだろうか。それを伝えるのが，旧約聖書偽典中の一書「アリステアスの手紙」である。それによるとプトレマイオス2世フィラデルフォス Ptolemaios II. Philadelphos (紀元前 285-247) という書物好きのエジプト王が，アレクサンドリアの図書館にその地のディアスポラのユダヤ人達が持っている書物（モーセ五書）をぜひギリシア語に翻訳して備えたいと思い，エルサレムの大祭司に学者を送ってくれるように要請した。そこで十二部族の各部族から6人づつ計72名（この数は後に70にされる）の学者がアレクサンドリアにやって来て72日間で五書を翻訳し，最後にギリシア語訳の本文が照合されると，それらはぴたりと一致した。その後，この翻訳は会衆の前で朗読され，学者及びディアスポラ共同体の指導者達によって公認されたという。

この物語をそのまま史実と考える必要はないであろう。しかし，この物語が示唆する歴史的事実が何であり，また何故にこのような物語が創作されたのかを考える事は重要である。最初の問，アリステアスの手紙が示唆する歴史的事実は何か。それに対する答えは恐らく次のような事であろう。セプトゥアギンタは，少なくとも五書の部分については確実と考えられるのだが，紀元前3世紀にアレクサンドリアで多くの学者達[2]によって完成され，ディアスポラ集団によって権威あるものとして公認されたという事である。では，後者の問についてはどうだろうか。何故にこのような物語が創作されたのだろうか。現在我々が手にするセプトゥアギンタを見る時，その本文が同一の個所において写本により様々な程度に異なる場合がある。それは写本による伝承であるという問題，また翻訳の際のテキストが違うのではないかという問題もあるにはあるが，より根本的な問題として翻訳というものが持つ本質的問題があったと考えられる。即ち，あるヘ

ブライ語の一文をギリシア語に翻訳する場合，その表現は必ずしも一通りではないであろう。そこで訳文が原文に忠実かどうかが問題とされ，改訂される場合さえ出て来る。恐らくそのような翻訳の持つ本質的問題がセプトゥアギンタ成立当時にも存在したのであろう。従って，端的に言うと，この物語はセプトゥアギンタ本文がヘブライ語本文に対して忠実でないという批難に対する弁護——その積極的表現は，本文の一致を語る事から分るように，セプトゥアギンタは霊感を受けているという主張——の為であると言えよう。とにかくセプトゥアギンタは，その翻訳の文体の多様さからも明らかだと考えられるのだが，個人の手になるものではなく，複数の人の手になるものであり，しかも，一時期に出来たのではなく，ある程度長い期間に渡って成し遂げられた翻訳の集成版とでも称すべきものと考えられ，そのようなセプトゥアギンタを弁護する為にアリステアスの手紙という文書が作られたと考えられる。

ところで，セプトゥアギンタは何らかの先行するギリシア語訳やギリシア語訳する際の何らかの習慣なしに全く最初のギリシア語訳として成立したのだろうか。会堂で五書がヘブライ語で朗読された後，ヘブライ語が理解できなくなった人々の為にアラム語で口頭翻訳され，それが後に成文化されたアラム語タルグムのように，ギリシア語でも同様の現象が考えられないだろうかという問である。これが P. Kahle の主張するセプトゥアギンタ・ギリシア語タルグム説[3]であるが，現在ほとんど支持されていない。むしろ，セプトゥアギンタは統一的なある本文に遡り，それが伝承の中で変形されたと考える方が普通である。そして，そのようなセプトゥアギンタの統一的なギリシア語の原本文の基礎となったヘブライ語本文はどのようなものであり，マソラ学派の伝えた現在のヘブライ語本文とどのような関係にあるかについて研究する事あたりまでが，セプトゥアギンタの成立をめぐる研究課題である。

さて，次にそのようにして成立したセプトゥアギンタが伝承される際の問題点について考えてみよう。写本によって伝承されるという事から生ずる無意識的変更（筆写ミス等）を別にすれば，問題となる事柄は基本的に前述の翻訳の持つ本質的問題から生ずるのであり，次の二つに大別される。一つは，セプトゥアギンタ本文の改良による校訂本文の問題であり，もう一つは，セプトゥアギンタ本文の改良では収まり得ないので新しいギリシア語訳を作るという問題である。後者から見てみよう。

紀元前3世紀以後かなりの時間をへて成立したセプトゥアギンタは，元来ディアスポラのユダヤ人社会の為にあったものであったが，紀元1世紀になりキリスト教が成立して，その旺盛な伝道が開始されると共に異邦人（非ユダヤ人）キリスト教徒の急速な増加を見，その結果セプトゥアギンタは異邦人キリスト教徒にとっても聖書として受容され使用されるようになった。この趨勢は更に進んでキリスト教徒がユダヤ教の護教家との論戦の中でセプトゥアギンタを用いるという情況が現出するまでに至った。そこでユダヤ教側は，キリスト教側が論争の際の根拠として用いるセプトゥアギンタがヘブライ語本文を忠実に訳していないとか，キリスト教徒による付加が

あるというような事を理由としてセプトゥアギンタを次第に退けるようになった。そこでユダヤ教側としては新しいギリシア語訳を作る必要が生じ，数種類の新訳が誕生することになった。中でも，アキュラス *'Ακύλας*[4] 訳，テオドティオン *Θεοδοτίων*[5] 訳，更にユダヤ教側ではないと思われるシュンマコス *Σύμμαχος*[6] の訳は特に有名である。これらは，2世紀前期から3世紀初頭に成立したが，まずアキュラス訳は，ヘブライ語とギリシア語が一対一対応を示し得るような機械的ともいえる程にヘブライ語に忠実な翻訳のスタイルを持った訳であり，セプトゥアギンタを嫌ったユダヤ人達から歓迎された。しかし，この訳の上記の如き規則性も語彙の面でのみ言えるのであって文法の面では不正確な面もある事が最近の研究[7]によって分っている。次にテオドティオン訳であるが，これは全くの新訳ではなく何らかのギリシア語訳（それとセプトゥアギンタとが如何なる関係にあったかは不明）をヘブライ語本文に基づいて改訂したもののようである。この訳はユダヤ教徒よりはむしろキリスト教徒に迎えられ，特にダニエル書においてはセプトゥアギンタ本文を駆逐するに至った。最後にシュンマコス訳であるが，これは実に美しい訳で，アキュラス訳のように一語一語を忠実に訳す事ではなく，ヘブライ語本文の持つ意味を全体として麗しく訳出する事を目ざしていたと思われる[8]。これら三つの訳は，現在まで完全に伝えられているわけではなく，ほとんど断片的に，しかも主にオリゲネスの編纂したヘクサプラ中に伝えられたものの断片として残るのみである。

では次に前者，校訂本文の問題について見てみよう。ヒエロニムスによれば[9]，4世紀になるとセプトゥアギンタは三つの地域でそれぞれ異なった校訂本文を示していたという。即ち，エジプトとアレクサンドリアではヘシュキウス Hesychius[10]（年代不詳）の校訂本文，コンスタンティノープルからアンテオケにかけてはルキアヌス Lucianus[11]（年代不詳）の校訂本文，そしてこれら両地域間のパレスチナではオリゲネスの校訂本文が支配的であったという。しかし，我々はこの報告から校訂本文はこの三つのみであったとか，三つとも確実に存在したとか考える必要はない。現在，我々は *καίγε* 校訂本文やカテナ Catena 校訂本文等[12]をも知っているし，ヘシュキウス校訂本文は，その存在自体が疑問視されてさえいる。

では，オリゲネスの校訂本文はどうだろうか。この本文は，従来のセプトゥアギンタ本文とは異なったものであると考えられる。というのは彼の時代には上述の三訳等がすでに存在しており，ギリシア語の旧約聖書が何種類も存在するという事からセプトゥアギンタ本文に混乱が生じていたし，加うるに上記のようにセプトゥアギンタ本文はヘブライ語本文と比較すると忠実な翻訳ではないという批難があったので，ここに彼オリゲネスは，種々のギリシア語訳を相互に比較し得るように欄の形で配置したヘクサプラ（六部共観）Hexapla[13] という旧約聖書を編纂し，その第5欄にセプトゥアギンタ本文を配置し，その本文とヘブライ語本文との異同をアレクサンドリアの文献学者アリスタルコス Aristarchos (ca. B. C. 217-145) の記号[14]を用いて示し，ヘブライ語本文にあってセプトゥアギンタ本文にない部分は他の訳（主にテオドティオン訳）で

補完したものがオリゲネス校訂本文だからである。この校訂本文はエウセビオスらによって広められたが，アリスタルコスの記号は省略されることが多かったようで，その結果オリゲネスの意図とは逆にセプトゥアギンタ本文を混乱させる事になった。

最後にルキアヌスの校訂本文[15]はどうだろうか。彼はサモサタの生まれである事から判るようにシリア人であり，ヘブライ語にも通じていたと思われる有能な人である。彼は，そのような能力を活かしてヘブライ語本文とセプトゥアギンタ本文とを比較してヘブライ語本文に近く改訂したようである。その際に彼が用いたヘブライ語本文とセプトゥアギンタ本文とが如何なるものかは不明であるが，伝統的に言われる三つの校訂本文の中ではルキアヌス校訂本文が最も標準的なものと考え得る。

このようにセプトゥアギンタの校訂本文は何種類もあり，それが写本による伝承の過程で相互に複雑に影響し合っていると考えられるわけであるから，校訂本文について考える際には写本の本文系統を明確にする事が極めて重要である。様々な本文異同を示す写本を校訂本文系に分類し，そこからオリジナルのセプトゥアギンタ本文に帰ろうと考えるラガルデ Paul Anton de Lagarde の試みは，彼自身においては成功したとは言えないが，彼の高弟である前述のラールフスは，ラガルデの考え方（校訂本文系を明確にする）に従ってセプトゥアギンタの批評版[16]を作る仕事を1931年にゲッティンゲンで始めた。現在，その仕事は，J. Ziegler. R. Hanhart, J. W. Wevers らによって受け継がれ続行中である。

こういうわけでセプトゥアギンタの伝承についての研究課題として当然考えられるべき事として，まずセプトゥアギンタの各写本・各校訂本文，更にセプトゥアギンタ以外の各ギリシア語訳の相違を明らかにし，それぞれの個としての性格を明確にするという事があげられる。しかし，それだけではない。もう一つある。それは，校訂本文や新しい翻訳を作った人が如何なる言語的緊張の中から伝承されたような言葉を選択したのかを明確にするという事である。この二つの課題は，前者が伝承の通時的事情を明らかにするという性格を持っているのに対して，後者は伝承の共時的事情を明らかにするという性格を持っており，両者相俟ってセプトゥアギンタの伝承を立体的に解明するのである。

その他に問題として考えられるべきは，セプトゥアギンタの内に含まれている外典の問題である。外典 Apokypha[17]とは，ヘブライ語正典になくて，セプトゥアギンタに含まれるもの[18]と一応考えて良いが，写本により多少異なる場合があり，また偽典 Pseudepigraph[19]との境界が明瞭でないマカベヤ第四書やエズラ第四書などもあり，事情は複雑である。本論の範囲では，この問題に立ち入る必要はないと考えられるが，ただ大切な事は，セプトゥアギンタは外典を内包しており，また一部の偽典は新約聖書の中で前提されてもいる[20]ので，我々はこれらの外典や偽典をも考察の範囲に含めておく必要があるという事である。

注

(1) セプトゥアギンタについて全般的に知る為には，各種の聖書辞典及び旧約聖書緒論の当該項目を参照する事が第一に為さるべきであるが，その次に参照すべき文献を少し例挙しておく。

① H. B. Swete, An Introduction to the Old Testament in Greek, Cambridge, 1902²; revised by R. R. Ottley 1914. Reprint of the revised edition, New York, 1968.

これは，今世紀初頭のものであるが，教父等の基礎的なテキストを原典で引用したり，付録に H. St. J. Thackeray の編になる The Letter of Aristeas のギリシア語本文を加えたりしている点等で資料的価値を持っており，今日でもなお有益なものである。

② S. Jellicoe, The Septuagint and Modern Study, Oxford, 1968.

これは，①の後，半世紀を経た時点でセプトゥアギンタ研究を概観したもので，今日のセプトゥアギンタ研究にとって基礎的なものである。

③ S. Jellicoe (ed.), Studies in the Septuagint: Origins, Recensions, and Interpretations. New York, 1974.

これは，②の著者が死亡する（1973年）前に最近のセプトゥアギンタ研究の諸論文の中から35篇の代表的なものを選び出して6つの項目〔Ⅰ．セプトゥアギンタ研究概観，Ⅱ．セプトゥアギンタの起源，Ⅲ．伝承史，Ⅳ．本文，翻訳の手法，Ⅴ．新約聖書と教父におけるセプトゥアギンタ，Ⅵ．セプトゥアギンタの意義〕に分類し，約50頁のプロレゴメノンを付して編集したもので，死後，H. M. Orlinsky の編になる Library of Biblical Studies の一冊として刊行された。

④ J. Ziegler, Die Septuaginta. Erbe und Auftrag: Würzburger Universitätsreden 33, Würzburg 1962.

これは，現代のセプトゥアギンタ研究の第一人者の一人である著者が行なった講演であって決して網羅的にセプトゥアギンタを解説したものではないが，具体例を示しながら語られていくセプトゥアギンタの遺産と課題についての明解で平明な言辞は人をして納得せしめる力がある。

⑤ S. P. Brock, Die Übersetzungen des Alten Testaments ins Griechische, in: Theologische Realenzyklopädie Bd. 5 (1980), 163-187.

これは，セプトゥアギンタ研究の最も新しい文献（1970年代のもの）を知るのに有益である。

⑥ S. P. Brock/C. T. Fritsch/S. Jellicoe, A Classified Bibliography of the Septuagint, Leiden, 1973.

これは1960年代末までのセプトゥアギンタ研究の文献を分類整理したもので絶対に必要なものである。

(2) それは，70人に限らない。むしろ70という数が意味する事は次のような事であろう。ヘブライ語で7は שֶׁבַע といい，この語根の שבע は語根 שבע（「満ち足りている，十分である」というような意味を持つ）と関連していると考えてよい。そこから7の10倍の70は「おびただしい」というような意味を持つと考えられる。聖書では7は聖なる数であり，その10倍数70も聖なる数なのである。以上，Ziegler, a. a. O., S. 5f. による。

(3) vgl. Paul E. Kahle, The Cairo Geniza, Oxford, 1959². 209-264 (The Septuagint).

(4) 彼は，Sinope の生まれで，ユダヤ教に改宗したギリシア人である。ユダヤ教のラビ（恐らく Akiba）に師事した。その生涯の絶頂時はエピファニウス Epiphanius (†403) の De mensuris et ponderibus 14によるとハドリアヌス Hadrianus 帝の12年（128-129年）であったという。

(5) D. Barthélemy, Les Devanciers d' Aquila (VTS10), Leiden, 1963. の中でバルセレミーは，一世紀前半に生きたヨナタン・ベン・ウジエル Jonathan ben 'Uzziel とテオドティオンを同一視してテオドティオンをアキュラスより先に置いている (S. 144-157)。しかし，普通はコモドゥス Commodus

帝（180-192年）の頃に絶頂期を迎えた人と考えられ（De mens. et pond. 17による），当然アキュラスよりも後の人ということになる。彼もユダヤ教に改宗した人であったといわれるが，エビオン派の人であったという説（Hieronymus, Praef. ad Daniel）もある。

（6）彼は，エウセビオス Eusebios（†339）の「教会史」Historia Ecclesiastica 第6巻17章とヒエロニムスの De viris inlustribus 54によればエビオン派のキリスト教徒であるといわれ，エピファニウスによれば（De mens. et pond. 15）サマリヤ人であったといわれる。

（7）K. Hyvärinen, Die Übersetzung von Aquila, Uppsala, 1977.

（8）シュンマコスについては次のものを参照。古いが現在もなお最良のものである。H. J. Schooeps, Symmachusstudien I (1942), II (1945), III (1948). Nachdruck in: Aus frühchristlicher Zeit, Tübingen, 1950.

（9）Praet. in Lib. Paralip., PL 28, 1324-1325.

（10）このヘシュキウスが如何なる人物かは謎に包まれている。ただ一般にはエウセビオスの「教会史」第8巻13章7節に出て来るエジプト教会の殉教した司教の一人と同一視されているが，その真偽の程は定かではない。なお，ヒエロニムスによれば（Praef. in Quatuor Evangelia, ad Damasum, PL 29, 527）ヘシュキウスも次のルキアヌスもセプトゥアギンタのみならず新約聖書をも校訂している。

（11）ルキアヌスは，同じくエウセビオスの「教会史」第8巻13章2節に出て来るアンテオケ教会の長老で殉教（†312）した人物と普通考えられている。彼はサモサタ Samosata の出身でパウルス Paulus と同郷のため，多少の事が知られている。vgl. F. Loofs, Paulus von Samosata (TU 44, 5), Berln, 1924, 183-186 et al.

（12）*καίγε* 校訂本文とは，ヘブライ語の גַּם を常に *καίγε* と翻訳する特長を持つ本文群の総称である。バルセレミーの前掲書は，三訳等をも含む紀元2世紀までのギリシア語旧約聖書の校訂本文についての理論を示している。

カテナ（聖書の順序に従って関連する教父の著作を鎖 Catena のように結びつけ編集した中世時代の産物）校訂本文とは，A. Rahlfs がセプトゥアギンタの批評版を出す前段階として1922年に出版した次の二つの研究 Studie über den griechischen Text des Buches Ruth (Göttingen) と Das Buch Ruth griechisch als Probe einer kritischer Handausgabe der Septuaginta (Sttutgart) の中で示したもので，普通Cという記号を用いる。この他に彼は由来不明のR校訂本文も指摘した。

更に，M. L. Margolis は，有名な彼のヨシュア記の批評版に際してC校訂本文（先のカテナ校訂本文とは別のもの）を指摘した。vgl. Max L. Margolis, Specimen of a new edition of the greek Joshua, in: Jewish Studies in Memory of Israel Abrahams. New York, 1927.

（13）ヘクサプラは次の六つの部分からなる。第1欄：ヘブライ文字ヘブライ語本文，第2欄：ギリシア文字表記ヘブライ語本文，第3欄：アキュラス訳，第4欄：シュンマコス訳，第5欄：オリゲネス校訂本文，第6欄：テオドティオン訳。このヘクサプラは大部なものであっただけに筆写される事は稀であったようで今日では断片として伝わるのみである。それらの断片は，F. Field, Origenis Hexaplorum quae supersunt (Oxford, 1875; Nachdruck Hildesheim, 1964) に集められている。また，エウセビオスの「教会史」第6巻16章によると，少なくとも詩篇については，上記以外の名前の知られていない第5訳 Quinta・第6訳 Sexta・第7訳 Septima の三つの訳もヘクサプラに加えられたという。詩篇以外の書でもこれら無名の三つの翻訳が存在したかどうかは定かではない。フィールド編の上記ヘクサプラテキストでは詩篇以外でも見られるが，それらの伝承には疑問の余地がないわけではない（vgl. H.-J. Venetz, Die Quinta des Psalteriums, Hildesheim, 1974)。更にヘクサプラの伝承中には，*ὁ Ἑβραῖος・ὁ Σύρος・τό Σαμαρειτικόν* という翻訳名が登場するが，絶対量が極めて少なく実像はつかみがたい（vgl. F. Field, a. a. O., Prolegomena S. 71-84)。ヘクサプラについては，

さらに拙論「ヘクサプラ断片の残存率について——ヘクサプラ研究 1 ——」(京都大学 基督教 学会編『基督教学研究』第 4 号〔1981年〕160-173頁) を参照されたい。

(14) vgl. Diog. Laert. 3,65f.

(15) ルキアヌス校訂本文については，現在でも最良のものである次の文献を参照。B. M. Metzger. The Lucianic recension of the Greek Bible. in: Chapters in the History of New Testament textual criticism, Leiden, 1963.

(16) ラールフスは死の直前 (1935年) に二巻本 (最近，小型の合本が出た) の普及版セプトゥアギンタ刊本 Septuagint. Id est Vetus Testamentum graece juxta LXX interpretes (Sttutgart) を，主としてシナイ写本 Codex Sinaiticus (略号 ✡，4 世紀)・バティカン写本 Codex Vaticanus (略号 B，4 世紀)・アレクサンドリア写本 Codex Alexandrinus (略号A，5 世紀) の三つの大文字写本を用いて編纂し，一般には現在これが用いられている。しかし，ここでいう批評版とは完成すると16巻になる予定 (現在，予定の半分程が完成している) の Septuaginta. Vetus Testamentum Graecum Auctoritate Academiae (*sive* Scientiarum) Gottingensis editum である。この他にもセプトゥアギンタの批評版はあり，大型のものとしては前述のバティカン写本を中心にし，主にその他の大文字写本によって本文の異同を示すという編集方針で編纂されているケンブリッジ版 A. E. Brooke-N. Mc Lean (eds.), The Old Testament in Greek, Cambridge, 1906 ff. である。こちらも予定の約半分が完成しているが，1940年以後一冊も出ていない。ケンブリッジ版が現実に存在する特定の写本を中心にして編集するというリアリズムを示しているのに対してゲッティンゲン版は，ケンブリッジ版よりも広い範囲で写本を校訂本文の系統に分類し，そこから批評的セプトゥアギンタ本文を再構成しようとするイデアリズムを示しているという点に両版の大きな相違がある。

(17) vgl. L. Diestel, Geschichichte des Alten Testament in der christlichen Kirche, Jena, 1869 (Nachdruck: Leipzig 1981). S. 70ff; T. Zahn, Geschichte des Neutestamentlichen Kanons I., Erlangen, 1888 (Nachdruck: Hildesheim 1975). S. 85ff.

(18) エズラ第一書，マカベア第一・二・三書，トビト書，ユデト書，ソロモンの知恵，ベン・シラの知恵，エステル書付録，ダニエル書付録，マナセの祈り，バルク書，エレミヤの手紙など。

(19) 偽典についての最近の研究情況については，次のものを参照。N. Brox, Zum Problemstand in der Erforschung der altchristlichen Pseudepigraphie. in: KAIROS N. F. xv (1973) S. 10-23.

(20) 例えば，ユダ書 9 節は「モーセの昇天」を前提している。

第 3 節　本研究の基本構想とその方法

第 1 節で我々は宗教における経典言語をとりあげ，それがその宗教にとって極めて重要な意味を持っていることを述べ，キリスト教にとっての経典言語は何かを考察した。その答としてヘブライ語のみでもギリシア語のみでもなく，かといってヘブライ語とギリシア語との二語並存でもなく，ヘブライ語とギリシア語との二位一体性を提唱した。そして，その最初の場としてのセプトゥアギンタを指摘した。第 2 節では，そのセプトゥアギンタ及びそれに関連して現われたヘクサプラとは何かを概観した。本節では，それらの事を踏まえて，「序」で述べた「セプトゥアギンタ及びヘクサプラの研究に基づいて新約聖書及び初期キリスト教会の思想を思想史的に解明すると」いう課題の内「基づいて」という事がどうしていいうるのかについて叙述する。

新約聖書が「新約」と称するが故に「旧約」を前提とするというごく一般的な理解に基づいてセプトゥアギンタを新約聖書研究——それは更に初期キリスト教の思想の研究へと続く——の前提と考える事は広く承認を得る処であると思う。しかし，同じ旧約聖書でもヘクサプラは，新約聖書より以前に出来たものではなく，3世紀の産物である。では，どうしてヘクサプラを新約聖書研究と連続させうるのであろうか。ここで読者の脳裡には，恐らく次のような考えが浮かぶのではないかと思う。即ち，ヘクサプラはセプトゥアギンタ本文の伝承をかえって混乱させることになったものであるから，セプトゥアギンタ研究の中でも難物であり，まずここでの伝承の錯綜状態を解きほぐし，セプトゥアギンタ本文の伝承をより明確なものにする事が先決なのであると。そのように考える事は極めて正当な考え方であると思われるし，筆者もまたそのような考え方の故にセプトゥアギンタの研究をヘクサプラから始めているのである。しかし，筆者がヘクサプラを最初にとりあげようとするのには，もう一つの意図（ヘクサプラの研究を新約聖書の研究に役立てる）がある。それは第1節で述べたヘブライ語とギリシア語との二位一体性という事と関連する。セプトゥアギンタは旧約聖書のギリシア語訳であるから，ヘブライ語とギリシア語との対応関係は常に考え得る。しかし，セプトゥアギンタは新約聖書よりも前のものであるから，セプトゥアギンタにおけるヘブライ語——ギリシア語の対応関係が新約聖書についても全く同じであったとは言い難い。ではヘクサプラはどうであろうか。ヘクサプラ中に含まれる三訳等は2世紀のものであって新約聖書と同じあるいは後のものであるから，新約聖書が内在的に有しているヘブライ語——ギリシア語対応の緊張関係に近いものを示していると考え得る。そのことは，仮に新約聖書が内包しているヘブライ語——ギリシア語対応関係と重なり合わない部分が多いというような結果が出たとしても，正に新約聖書の記者達の同時代の言語緊張関係の図式を示し，彼らがそのような中から新約聖書に示される表現を選択したのであるという事を明らかにする役割を果たすのである。

従って，セプトゥアギンタにおけるヘブライ語——ギリシア語の対応関係（それには必ずしも一つの関係ではなく時代や訳者等によるある程度複数の関係が存在すると考え得るのだが）と，ヘクサプラにおける対応関係とを明らかにしていく事によって，その間にある新約聖書の理解に何らかの光をあてうるのではないであろうか。

このようなヘブライ語とギリシア語との対応関係は必ずしも単語のレベルでのみ考察されてはならず，否むしろ言語はその言語の語彙緊張においてのみ活動するのであるから，それは基本的にはありえない事であるのだが一応「単語」という表現を用いるならば，このような関係は，文・段落という広がりにおいても考察されねばならない。しかし，その基礎は単語レベルでの対応関係を明確にする事の内にある。この作業は，セプトゥアギンタの場合，すでに出来上がっているコンコルダンス(1)を不十分ながら用いることが出来るが，ヘクサプラの場合には必ずしも簡単な事とはいえない。というのは，アキュラス訳のインデックス(2)のように部分的なものはある

が，全体としてはヘクサプラには十分なコンコルダンスがない[3]。テキストもフィールドの版があるが，必ずしも十分ではなく，アキュラス訳のインデックス作成中に分ったことだが，フィールド版が伝える各訳の名称は時々間違っているという事がある[4]。それゆえヘクサプラについては，ゲッティンゲン版のヘクサプラ脚注欄を参照しつつ自分でヘブライ語——ギリシア語の対応をさせていく必要がある。ただし，旧約全体のゲッティンゲン版はまだ出来上っていないので，ゲッティンゲン版のない部分については当分フィールド版を用いねばならない。その場合には，各訳の名称の伝承が誤っているという可能性も考えられるわけであるが，伝承された言葉そのものが正しいならば，少なくとも総体としての共時的関係を把握することは可能である。例えばアキュラス訳とテオドティオン訳の名称が逆になっていたり，他の訳の名称になっていたとしても，そこで示されたギリシア語——ヘブライ語の対応関係は，当時の言語緊張として対応可能であったという事には何ら変化ないのであるから，共時的関係がどのようであったかという事は示されうるはずである。そして，そのような共時的関係全般の解明がヘクサプラ伝承の存在しない部分，混乱している部分に対しても逆に光を投げかけるという事も考え得るのではないであろうか。フィールド版を用いたとしても少なくともそのあたりまでは解明できるはずである。

以上の過程を別の表現で示すならば，歴史的に存在するもの（ヘクサプラ断片やセプトゥアギンタ）から理論的なもの（ヘブライ語——ギリシア語の共時的対応関係，及びその通時的変化）をひき出し，さらにその理論的なものから歴史的に錯綜している部分の分析へと向うという歴史的なものと理論的なものとの相互嵌入的方法の遂行であるといえよう。その際，ヘブライ語——ギリシア語の対応関係の研究には，コンピューターを用いてデーターの収集・整理・分析を行いたいと思っている。

注

（1） E. Hatch-H.A. Redpath, A Concordance to the Septuagint and the other Greek Versions of the Old Testament, 2vols. (Oxford 1897) and a Supplement (Oxford 1906): Nachdruck, Graz, 1975.

（2） J. Reider-N. Turner, An Index to Aquila (VTS 12), Leiden, 1966.

（3） 注（1）に示したコンコルダンスには，ヘクサプラの個所だけは，一応示されているがヘブライ語との対応は示されていない。それに，このヘクサプラの部分では，誤りや脱落が多い。ヘブライ語との関係では，上記コンコルダンスを補うものとして，E. C. Dos Santos, An Expaned Hebew Index of the Hatch-Redpath Concordance to the Septuagint, Jerusalem 1973. がある。

（4） P. Katz-J. Ziegler, Ein Aquia-Index in Vorbereitung, VT 8 (1958), 264-285.

Zur Forschung der griechischen Bibel

Toshiyuki ITO

Die griechische Bibel (Altes Testament und Neues Testament) ist für Christentum gründsetzlich wichtig, denn sie war die Bibel der ersten christlichen Kirche. Vornehmlich ist die Septuaginta (Griechisches Alten Testament) wichting, weil Neues Testament doch Altes Testament voraussetzt. Theologische Begriffe des Alten Testaments sind der Mutterleib der neutestamentlichen und christlichen Theologie. In diesem Sinne ist die Forschung der Septuaginta einschliesslich der hexaplalischen Tradition mit anderen jüngeren griechischen Übersetzungen des Alten Testaments eine gründlich bedeutsame Voraussetzung für die wissenschaftliche Forschung des Neuen Testaments und der Kirchenväter.

Altes Testament selbst ist ursprünglich nicht in griechischer Sprache sondern in hebräischer geschrieben. So haben die griechische Ausdrücke der Septuaginta immer den hebräische Boden. Diese 'Hebräisch-Griechische Sprachspannung' zeigt sich als eine untrennbare Beziehung, die sozusagen 'Duonität (Zweieinigkeit)' gennant ist. Ich denke, diese Beziehung sei auch im Neuen Testament latent. Aus diesem Grund werde man zur neutestamentlichen Forschung beitragen, indem man die hebräisch-griechischen Entsprechungsbeziehungen in der Septuaginta und Hexapla ausführlich untersucht. Bei der Untersuchung dieser Entsprechungsbeziehungen will ich den Computer gebrauchen.